

沈下橋は親水橋！“沈下橋よ 永遠なれ”＝四万十町窪川＝

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、“四万十川沈下橋保存方針”と、写真家 武吉孝夫さんについてお伝えします。

四万十川流域の景観と生活の中に、なくてはならない沈下橋。欄干のないシンプルなこの橋は、その名のとおりに、大水の時には水面下にその姿を隠し、水の抵抗を和らげながら、自然に抗うことなくそれをやりすごす。そして嵐が静まれば、変わらないその姿を、また水の上へのぞかせる。そこには、あるがままの自然を受け入れて、自然と共に生きてきた、ここに暮らす人々の生活様式が伺える。

四万十川と沈下橋

四万十町窪川でフォトスタジオを経営する、写真家、武吉孝夫さんは、1946 年、四万十町大向で生まれた。家の側には四万十川が流れ、幼い頃からこの川を“大川”と呼び親しんで育ってきたという。生家の近くには若井沈下橋があるが、これが完成するまでは、対岸の集落まで渡し舟を使って行き来していたことを記憶している。

四万十川流域では、昔から、川を渡るのには苦労してきたので、橋の架設は住民の切望するところであったということだ。それ故、台風が多かったこの地で、渡し舟や木製の仮橋などに替わって、少しの間水につかっても流されることのないコンクリート製沈下橋が完成した時は、盛大な落成式で、村を挙げての祝いだったと、武吉さんは当時を懐かしそうに語ってくれた。

「昭和 30 年代、戦後の貧窮経済からやっと立ち直ろうとしていたこの時期、その時代の経済に照らし合わせ、私たちはこの橋を選択してきました。沈下橋を造るにあたっては、地域の労働奉仕もあったりし、住民自ら参加して橋ができたのです。」

しかし、沈下橋は増水時には橋として機能しなくなるという弱点も持つ。日本が経済的に豊かになってきた昭和 50 年頃を境に、増水時には通行止めとなる沈下橋に替わり、増水しても浸かることのない“抜水橋”と呼ばれる大橋の時代がやってくる。

「あんなに切望し、苦労して造った橋であったのに、抜水橋ができると同時に、まるでそれがあたりまえかのように、古い沈下橋を壊していったのです。」

古いものが新しいものに、いとも簡単に取り替えられていく。時代の流れと言ってしまうればそれまでではあるが、四万十川と、そこに架けられた沈下橋とともに生きてきた武吉さんは、何かやりきれないものを感じていた。そして、沈下橋を、昭和という時代を象徴する生活文化遺産だという視点と同時に、川を知る学びの施設として、保存活用できないものかと考えるようになった。

“自然に保護されている”という“文化”

20 歳代、故郷を離れ写真の勉強をしていた武吉さんは、これからのことを考え悩んだとき、東京に出て行くかそれとも故郷に戻って仕事をするかで迷ったという。

「その時に、自分は田舎を主題にして写真を撮ろうと思いました。その頃からもう既に廃れかけていた“民俗行事”、例えばオサバイ様、若水取り・・・など、郷土に伝わる“民の文化”に関しての“記録”をしたかった。それは、人間が自然や社会に対して感じていた心持ちを写真で表現したかったのです。」

こうして故郷に戻った武吉さんは、フォトスタジオを経営する傍ら、四万十川や流域に住む人々の生活、流域外の町並みなどを、写真によって記録し始めた。



《庭で》自分が出すくらい CO2 に責任をとりたて庭にも木を植えた



四万十町若井沈下橋（保存対象外）



夏の一日沈下橋で遊ぶことも達



釣り人と上岡（向山）沈下橋

その志のもと、ライフワークとしての写真を撮り続ける武吉さんは、35 年程前、四万十川最上流の梶原地区で“津野山文化”を撮っていた時、わかった事があった。「四万十川が清流だったのは、上流域が川を汚さなかったということがあると思う。その上流域の津野山文化の根底には、『自然を保護するのではなく、自然に保護されている』という“津野山びと”の文化があるということ、その時私は知りました。そういう文化こそが、真の文化であると思いたい。」

“沈下橋よ 永遠なれ” 沈下橋は“親水橋”

1993 年 7 月、武吉さんは自費で、写真集“沈下橋よ永遠なれ”を出版する。ページをめくるたび、四万十川上流から下流までの沈下橋・四万十川の、44 枚の美しい写真に魅せられる。

写真集のサブタイトルにある『沈下橋は親水橋』は、“親水橋”という性質の橋が存在すること、おそらく初めて世に出した書物であつたろうと思われる。

「人々の暮らしが、いつの間にか、川から遠のいてしまったのは悲しいことです。沈下橋は歩く人にとってはとても便利な場所にあった。子どもたちにとっても、水との距離が近いこの橋の上では、自然を最も学びやすかった。自分もこの川から、多くのことを学んだように、次の世代を担う子どもたちにも、この川を通して、様々なことを学んでもらいたい。そういう意味で、この橋は、“親水橋”と呼ぶにふさわしい橋だと思っています。」

この写真集は、当時の自費出版では異例の多さといわれた 1000 部の発行だった。しかし、無謀な数と言われたその 1000 部の写真集は、そのほとんどを自力で、手渡しで、1 ヶ月間という短期で売りきった。

「自分にとってそれは、本を売ること自体が目的でなく、取り壊される沈下橋の保存運動のためであつたからです。だから、売る行為自体を自分でやることに意味があつたのです。」

こうして、この写真集がきっかけとなり、沈下橋の保存に向けての住民運動が、大きく動き始めたのだ。

四万十川沈下橋保存方針

それほど遙か昔ではないのに、沈下橋が四万十川のこちらと向こう岸とをつなぐ唯一のものだったその頃、人は自然ともっと近かつたのだろう。

そして、そこには同時に、人々の自然に対する畏敬の念もあつたのだろう。

それ故、そこには、人と自然の程良い関係が生まれていったのだろうと思う。

1998 年 7 月、高知県は沈下橋が流域の生活・文化・景観・親水等に重要な役割を担っていることから、「防災上、維持管理上支障のない沈下橋は保存を基本とし、生活道に加え生活文化遺産として後世に引き継ぐ」とした、『四万十川沈下橋保存方針』を策定し、四万十川本流の 21 橋、支流の 26 橋の合計 47 橋を重点的に保存・維持管理することを決めた。

*このページの写真は、写真集“沈下橋よ永遠なれ”よりお借りしました。



「歳月と激流に洗われた沈下橋には、もう捨てるものは何も無い。それは洗われ切った岩に等しく、悠久の流れの上にリズムカルな橋桁の影を落とす四万十川パノラマの点景として、風景に同化している。民の川四万十の申し子である沈下橋は、自然と人間の程良い関係を教えてくれている。」

(沈下橋よ 永遠なれ 武吉孝夫写真集本文より)

